

二〇二〇年度入学選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題はⅡからⅢまで(16ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

孤独を嫌う本能的な感覚というのは、避けられないのだが、しかし、食欲などの生存に直結する欲望に比べると、それほど強いものではない。乳幼児のときには、それが支配的であっても、物心がつき、自分で考えるようになれば、しだいにそれ以外の、つまり経験による社会的な判断を重視するようになってくるはずだ。小さい子供は、自分の思いどおりにならないというだけで泣き喚くわけだが、**A**、そんなことをしても利がない、ということがわかってくる。これと同じように、寂しさや孤独感も、本能的な不利、**B** 生存の危機感ではないものによって判断されるようになる。それは何か？

仲間と力を合わせる事が美しいことだ、という社会的な価値を、多くの人が子供のうちから学ぶ。幼稚園に通うようになれば、周囲に同じ年齢の子供たちがいて、みんなと同じことをする、という訓練を強いられる。人はばらばらでは大きなことができない。小さな力でも一致団結すれば可能になる、ということを教えられる。また、人の言うことを聞かなければならない。ルールに従わなければならない。みんなと歩調を合わせ、自分勝手なことを慎むことが、「良い子」の条件になる。

このとき、「**1**良い子」に価値があると教えられるのだが、それは実に不思議といわざるをえない。この感覚は、犬などにも認められる。それ以外の動物では、あまり見られないかもしれない。つまり、「良い子だね」と撫でられるだけで、それがご褒美になる、というのは、自然ではあまりない珍しいことだ。そうではなく、普通は(つまり多くの動物は)なにかしらの利益(食べ物であったり、危機から逃れることであったりする)を得るために「良い子」になろうとする。餌をもらいたいから芸をする。鞭で打たれたくないから命令に従う、という動物はサーカスなどでも見ることができるとは。

2 幼稚園児は、オヤツをもらうために「良い子」になろうとするのではない。もちろん、人間の子供が、「良い子」であることに価値を感じるのとは、大人や、周囲の仲間たちから、「良い子だ」と認められるときだろう。ここで、重要なのは、自分が「認められる」という感覚であり、これも遡って考えれば、やはり群れを成す動物の本能にルートがあるかもしれない。ただ、それだけで説明ができるレベルではないと思われる。何故なら、群れを成す動物は多いが、「良い子指向」のような価値

観は、ペット以外では、つまり自然界ではあまり観察されないように思われるからだ。たぶん、猿などにはあるものだろうが、残念ながら猿を飼ったことがないし、猿の群れを観察した経験も僕にはない。

良い子であることに、ある種の快感を覚えるのは、自分の周囲(小さな社会)に自分の存在が認められている状態が、生存のために有利であるからだ。「存在が認められる」と書いたが、**C**、ただ認識されるだけではなく、グループの一員として「役に立つ」あるいは「役に立ちそうだ」と認められるという意味であって、敵対した存在として認められるのではない。

子供のうちによくあることだが、「認められる」の反対が「**I**」ことであって、その最悪の状態から脱するため、どんな形であれとにかく「認められたい」という気持ちが行先することがある。これは、反抗期なども含まれるかもしれない。つまり、少々悪いことをしてでも存在を認められたい、という欲求である。また、さらにこれが暴走すると、世間が自分を無視するから悪い、そんな世間に復讐かくしゅうしてやりたい、といった感情にもなるようだ。振り向いてくれないから、暴力を振るった、といったメカニズムである。

他者に自分を認めてほしい、という欲求は、「自分」というものの存在理由の基本的な要素となるもので、あるときはそれがすべてにもなる、と想像できる。アイデンティティとか自我とか、いろいろ呼び方はある。言葉だけだと、ただ自分を見つめること、自分の内だけで完結するもののような響きだが、そうではなく、他者を意識して初めて生じる自分、すなわち、「自分はみんなからどんなふうに見られているだろうか」という想像が出发点になっている。

周囲に自分を認めてくれる人間がいることは、「心強い」と感じられる状態といえる。それは、事実上生存とは無関係であつても、精神的な拠より所になる。

「良い子」というのは、最初からいきなり「社会における良い子」のではなく、「あの人にとって良い子」というように、他者が限定されている。多くの場合は、それは両親であり、もう少し年齢が上がると、先生や友達と広がっていく。こうし

て、自分を「良い子」と認めてくれる対象を少しずつ広げていくことで、社会における自分の「居場所」を作る。これは、動物が巣を作る行為に似ている。それを足掛かりとして、テリトリー(縄張)を広げ、自分の力が及ぶ範囲を拡大していく。そういった行為が、個人としての立派な生き方だ、といろいろなものが教えているからだし、また、そうすることで、自分の好きなことができる、という利益の確率(期待値)も増えてくる。

³ 年齢がさらに上がって、人生も半分以上を過ごした人になると、この「良い子」であろうとする感覚は、縮小し始めるようだ。それほど良い子が続けなくても、生きていけることを知るからだ。これはやはり、生存の危機感に関わっている証拠と思われる。つまり、十代などの若い世代には、「社会」というものの実体がまだよくわからない。自分の可能性も不明だし、なんとなく、他者は皆大人で、社会は恐ろしいところのように感じられる。だから、そういった恐ろしい大人や社会に逆らわないように、「良い子」であろうと防衛をするのである。そうしていなければ、社会から抹殺されるのではないか、それが自分の人生を台無しにするのではないか、という不安を持っている。

なかには、良い子になりそこねてしまい、そういった不安から逃れるために、「良い子になりそこねた」仲間の内に居場所を見つける子供もいる。これも、一人では反発できないが、仲間と団結をすれば、ゲリラ的な抵抗が可能だ、という戦略的なものといえる。一般の社会で「良い子」にならなくても、「悪い子」の仲間内であれば「良い子」になれるというわけだから、反発しているようで、実はまったく同じことをしている。その同じことというのは、すなわち「場の空気を読んで、群れを離れないようにする」ということだ。

さて、ここで再び、寂しさと孤独を考えると、以前よりは少し本質に近づけるように思える。つまり、仲間や友達の喪失というのは、結局は、自分を認めてくれる存在の喪失なのである。だから、仲間や友達がまだすぐ身近にいても(物理的に存在しても)、自分が認められていないことが判明したときに、それが失われる、ということになる。

おそらくこれは、人間のスノウ^①が持っている想像力にキーン^②しているだろう。他の動物であれば、目の前に仲間がいて、友

達がいて、家族がいれば、それで安心するのではないか。ところが人間は、周囲に大勢の他者がいても、その人たちが自分を認めていない、とわかれば、寂しく感じる。まるで、その人たちを失ったように感じるのである。

ここで大事なことは、他者が自分を認めていない、という判断は、自分の主観によって行われるということだ。もちろん、相手が「お前なんか認めないよ」とメイリョウに言葉で宣言したのなら、多少は客観的な判断になるかもしれない。しかしその場合でも、その言葉が彼の本当の気持ちを表したものと判断したのは、自分の主観なのである。

言葉というのは、人間が持っているコミュニケーション手段であり、これが人間の最大のトクチョウだといっても良い。言葉によってコミュニケーションが取れない状態というのは、人間的な行為がほとんどできない状況に近い。しかし、それでも、その言葉は、それを発する人の本心だという保証はまったくないのである。故意に嘘をつくこともできるし、また、言い間違える、というっかり発言してしまう、無意識に言ってしまう、売り言葉に買い言葉で返してしまう、などなど、多分にエライを含んだものである。しかし、これ以外に、相手の気持ちというのはなかなか認知できない。行動で判断できるのは、単に「好意的」か「敵対的」かといった雰囲気ではない。

したがって、自分が認められていない、という判断は、多分に主観であるから、自分で自分の寂しさ、孤独感をユウハツすることになる。仲間の中に自分がいても、孤独を感じるようになる。それは、たとえば、都会のような大勢の人々がいる場所でも孤独になれるということだ。孤独とは、基本的に主観が作るものなのである。

ただ、もちろん、主観とはいえないような状況も存在する。大人になれば、あからさまな危害というのは(法律で禁止されているわけだから)滅多に受けないが、子供のうちは、そうともいえない。突然暴力を振るってくる他者がすぐ近くにいたりも出来ない。相手にも相手の理屈があつて、「目つきが悪い」というような言いがかりをつけられることだつてあるだろう(大人でも、不良ややくざならあるかも)。勝手な主観で、「敵対的」だと判断され、先制攻撃を受けるわけである。こういった物理的な被害があれば、誰でも、「自分はいつにとつては良い子ではない」と判断するだろう。ようするに「気に入られていない」状況であり、つまりは、認められていないわけである。これなどは、客観に近いといえるかもしれない。

(中略)

他者に認められ、「凄^すい」と言われることが心地良く感じるのは、やはり自分の客観的な価値に目を向けている証拠である。自分の評価は、自分だけで勝手にできるものではない、つまり自己満足では不充分だ、ということがだんだんわかってくる。それに、親から褒められるよりも、赤の他人から褒められる方が嬉しい。それは家族よりも他者の方が、自分からは遠く、社会一般には近いからだ。無意識のうちに、社会という群れの中で、自分はみんなから「褒められる人」になりたいと願う。それが、その社会において居心地の良い居場所になる、という確かな予感からである。

このようにして、「凄^すい」ことで居場所を得られそうだ、という人間は、少なくとも、どん底の孤独に襲われることは少ないだろう。小さな範囲であっても、自分が認められているという確かなスペースがあれば、そこを拠り所にして立っていることができる。他者との関係が完全な「無」になることがない、といえる。また、どうすれば、その「凄^すさ」を維持することができるのか、どうすればもっと「凄^すい人」になれるのが、はつきりとしている。たとえば、学業が優秀なことで「凄^すい奴」になった生徒は、学問に没頭することが自分の居場所を確保する道だと知る。スポーツで「凄^すい奴」になった子供は、さらに凄くなるために何をすれば良いのかを知っている。このように、「凄^すさ」というのは、特定の人間に対する「人間関係」ではなく、もっと客観的な評価であるため非常に単純でわかりやすい。上手くいかない、というジレンマは生じるかもしれないが、どうすれば良いのかわからない、ということはない。

(森博嗣『孤独の価値』による)

問一 〓線部①⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 空欄 **A** **C** に入れるのに最も適切

なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア つまり イ しないで

ウ たとえば エ もちろん

問三 〓線部1『良い子』に価値があると教えられるの

だが、それは実に不思議といわざるをえない」とあるが、なぜ「不思議といわざるをえない」のか。その理由を説明せよ。

問四 〓線部2「幼稚園児は、オヤツをもらうために『良

い子』になろうとするのではない」とあるが、では何のために「『良い子』になろうとする」のか答えよ。

問五 空欄 **I** に入れるのに最も適切なものを次の

中から選び、記号で答えよ。

ア 復讐する イ 役に立つ

ウ 攻撃される エ 無視される

問六 〓線部3「年齢がさらに上がって、人生も半分以

上を過ごした人になると、この『良い子』であろうとする感覚は、縮小し始めるようだ」とあるが、若い世代が、この『良い子』であろうとする感覚を持つのはなぜだと筆者は考えているか。筆者の考えを説明せよ。

問七 〓線部4「エラー」とあるが、ここで言う「エラー」

とはどのようなものを指しているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 本心に従って行動すること

イ 本心が客観的には存在しないこと

ウ 本心そのままではない発言をすること

エ 本心をうまく伝える手段を持たないこと

問八 筆者は、人間が寂しさや孤独を感じるのはなぜだと

考えているか。次にあげる語をすべて用いて筆者の考えを説明せよ。

「他者」「居場所」「価値」

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

乃里子^{のりこ}や岩永が入ることになった三年四組というのは、私立大学の文科系コースだ。成績が優秀な生徒のために、国立系コースというのもあったが、乃里子はもちろんもれていた。

四組は岩永をはじめとするラグビー部のメンバー、美少女の今日子や、文学クラブの沢井など、どうもこのクラスは個性豊かなメンバーを集めたようなのだ。

その兆候は早くも、席をきめる時に現れた。選挙でルーム長に選ばれた小川君の、

「席のことですけど、自分、出席簿順でいいですねえー」

という発言に、岩永たちが騒ぎ出したのだ。

「冗談じゃないよオ、小川君」

口元に意味のない笑いをうかべて岩永は言った。

「いい女の隣りに座ることだけが楽しみで、オレたちはよ、毎日学校に来てんだから。そんなこと勝手に決められちゃたまりませんよ」

「そうですね、小川くうーん」

岩永の横にびったりと座っていた山口が、岩永がするとおりの、おかしな言いまわしで小川君をよんだ。ラグビー部に入っ
たものの、からだ小さく一度もレギュラーになれぬままマネージャーをしている山口は、岩永の「X」ともっぱらの評判だった。

「じゃ、どうすればいいんですか」

小川君は一瞬むっとしたような表情になった。

「だからさあ、小川君、公平にやらさあ。たとえばクジ引きにするとかさあ。ねえ、小川君」

岩永は甘ったれた口調で「小川君」を連発した。こうすれば彼がいらだつのがわかつているのだ。

小川君はほっそりとしていて、きちんと学生服を身につけているところは新入生のようにも見える。カラーをはずし、足を投げ出さんばかりにだらしなく座っている岩永や山口と同級生には見えない。

その日クラスメイトになったばかりの生徒たちは、そんな彼らを黙って見つめていた。

「じゃ、クジ引きにします。それなら文句ないでしょう」

小川君は岩永たちの顔を見ずに、教壇を降りて行った。そして自分の学生カバンの中から一冊のノートを取り出した。何も書いていない真白なノートだ。そのページを、クジをつくるために一枚ずつ大きな音をたてて破り出した。ピリッ、ピリッ……。小川君は副ルーム長の女生徒が駆け寄るまでずっと無言だった。

(中略)

冬のラグビー場を見た岩永の姿を、乃里子は今でも何かの拍子で思い出す。

胸厚で、ふつうの人の倍ほどの肩幅を持つ岩永が、まるで小ウサギのように敵の間をはいくぐるのを、驚嘆しながら乃里子は見つめていたものだ。そして敵にタックルをくわす時の、猛獣のような強さ。力と敏捷さは、なんの矛盾もなく彼の中にあつた。それが「天才ラガー」とか「二十年に一人の逸材」とよばれる所以なのだろう。

「岩永さあーん」

あの時スタンド席の後ろの方で、下級生の女の子たちが声をふりしほって叫んでいた。確かに岩永は弘明館こうめいかんのスターだった。

(中略)

大学へ進学しても、社会人となっても、おそらくスターであり続けるであろう基盤を、すでに岩永は高校時代に築きあげていたのだ。

「ラグビーは僕の人生です。ですからこれからは、ボールに触れることのない日々は考えられません」

そうインタビューに答える岩永には、すでに風格のようなものさえあって、その彼と、

「おい、美人の隣りにしろよな。そういうふうにくジを作れしな」と怒鳴る岩永が同じ人物だとは、にわかには信じがたい。

最近になって、岩永を敬遠する空気が、同級生の間に流れ始めているのも事実だった。ラグビー部の上級生が卒業し、岩永の知名度が増すたびに、皆が Y ような言動が多くなっているのだ。

「とにかく、授業中に堂々と居眠りしてたって先生がなんにも言わないだよ。化学の吉田先生だけが、おい、起きろって怒鳴ったらさあ、ぐいって顔を上げて『先生、オレはラグビーの練習で疲れてんだから』ってたったひと言。それで先生は黙っちゃうだよ」

以前、岩永と同じクラスだった放送部員の駒沢美美子がよくそんなことを言っていた。しかし、それと同時に、岩永と親しいということも、同級生たちは口々に言いたがった。

「私、小学校の時から岩永君と同級生だっただから。あの頃のことなんか何でも知ってるだよ」

「オレさ、このあいだ堀田んちへ遊びに行ったら、岩永も来ててさ、あいつ、いつもちゃんと煙草を持ち歩いていやがんの」

岩永の名前はいつも口の端にのぼり、そしてその名前をキーワードのように出すことで、みんなは友人としての共通項を見つけ出そうとするかのようにだった。

乃里子はそのと斜め向かいに座っている岩永を盗み見た。髪がえり足をおおっている。長髪が三年生の十月になるまで禁止されている弘明館で、これは明らかに校則違反だった。しかし、岩永にはそれが許されている。五月に発売する、カナダ遠征ラグビーチームの、彼は一員なのだ。外国へ行く時、坊主頭ではみっともないからという理由で、岩永は学校に長髪を許可してもらっていた。横に広い額の上に、横分けしてびっちり撫でつけたその髪は、岩永の特権意識と傲慢さをあらわしているかのように見える。

乃里子は再び校庭の桜を見た。手のひらの中には、ひとつの紙片が握られている。「十八」と、そこにはサインペンでなく書きがしてあった。

「あたし、五番」

「おっと、運が悪いなア」

気の早いクラスメイトの中には、すでにカバンを小脇にかかえているものさえいる。岩永たちは、なかなか動こうとはしない。

「まだ、引いてない人は、早くしてください」

小川君がもう一度声をはり上げた。

岩永たちは、大きな音をさせて机をどかすと、のろのろと立ち上がった。教壇の方へすすむ。大きな手をクジの入った帽子の中につっこむ。その一連の行為から、乃里子は目が離せなかった。なぜか嫌な予感がする。他の生徒たちも、なんとはなしに横目で岩永の動きを追っている。

「十八番、十八番、誰だよお」

黒板の前で、岩永は紙片を振りまわしながら怒鳴った。

⁴ 乃里子は自分のからだだが、すうっとこわばっていくのがわかった。とんでもないことが起こったと思うのと同時に、そうなることがごく当然のことのように思われたのも本当だ。昔から、ごく子どもの頃から、いちばん悪い想像をしていくと、それに追いつめられるように、現実になってしまふということが乃里子にはよくあるのだった。

「だあれ、誰なのかしら」

岩永は女のような声で小首をかしげてみせた。

乃里子は不安を打ち消そうとしていた。この二年間、弘明館で自分は決して嫌われる存在ではなかったはずだ。平凡で、いつもほんやりしている少女。まわりの人々は自分のことをきつとこう考えているはずだ。なにかしでかしたわけでもないのに、や揶揄や嘲笑の的にならうはずがない。

「私よ、私が十八番の紙を持つてるけど……」

できるだけ平静を装って言ったが、語尾がふるえていた。

「ヒエーッ」

と奇声を発したのは山口だった。

「ヒイ、ヒイーッ、こりゃいいわ。岩永、思ってたとおりの、いちばんいい女にあたったじゃねえか。ヒイー、こりゃいいわ」

岩永は一瞬、乃里子を見た。あきらかにどういう反応を示せばいいのか、彼は迷っていた。しかし、⁵彼はもう後にはひけなかつた。山口をはじめとするラグビー部の男の子たちのひやかす声は、すでに岩永をとり囲んでいた。

「なんだよお」

ややあつて彼は言った。

「こんなブスと隣りの席なのかよお、冗談じゃねえぜ。おい、小川君、悪いけど、オレだけもう一回クジ引きをしていいら？」

「そんなことは許されません」

小川君は遠くの席から声をはりあげた。

「わかつた、じゃ、誰かオレの席と取り替えっこしらざあ。岡崎の隣りだぜ。こりゃいいぜ」

気まずい沈黙が教室に流れ始めた。祐子ゆうこが困ったような顔をして乃里子を見つめている。

^A 目から熱いものが吹き出してきそうだった。しかし、それよりも怒りが徐々に乃里子を支配し始めてきた。中学生の頃、葡萄畑ぶどう

で会って以来、好意とはいえないまでも懐しい感情をいつも乃里子は岩永に抱いてきたような気がする。他の女生徒たちが、岩永のことを口汚なくのしる時も、乃里子は言い添えることはしなかった。その岩永から、こんな裏切りをうけようとは、乃里子は思ってもみなかった。

「ちよつと、岩永君」

こうして人の目をはっきり見つめて物を喋るといのは、乃里子の場合とても珍しい。自分の口が、熱い糸で操られているような気がする。

「あんた失礼だよ。私は今日、あんたのクラスメイトになったばかりで、あんたに対してなにも悪いことをしてないはずだよ。その私に、今みたいな言い方はないら？ バカ言うのも休み休みにしろし」

岩永は目を見張って、乃里子のタンカを聞いていた。弘明館のスターになってから、女生徒はもちろん、男生徒からもこうした言葉を聞くことはなかったはずだ。とまどう岩永の顔は急に幼く見え、その幼さは素直さとなって彼をうなずかせた。

「ごめん」

意外なひと言がもれた。

「悪かったね、岡崎さん。オレ、ちょっと言いすぎたわ」

拍子ぬけするほどあっけなく、岩永は自分の非を認めた。しかし、乃里子がつきにはそれを信用しなかったのは、彼の唇の端にまだ残っている微笑のせいだった。

「いいえ、私は許せない。こんな失礼なめに会って……」

「じゃ、こうすればいいなら」

乃里子の前に立ちふさがるようにしてあった、岩永の大きなからだは突然縮んだ。岩永は床の上に土下座したのである。

「岡崎さん、ごめんなさい。オレが悪うございました」

クラス中の者が息を呑んで見つめていた。乃里子はうろたえた。こんなことまでは要求しなかったのだ。しかも、岩永のやり方は芝居がかりすぎている。皆の目を意識しすぎている。多少の不安はよぎったものの、激しい満足感が乃里子の胸におし寄せてきた。そして乃里子は少々、凶に乗りすぎたのである。

「私はまだ許さないわよ。あんたはすぐくひどいことを言っただから……」

こんな場面をどこかで見たことがあったつけ、と乃里子は思った。そうそう「赤毛のアン」の中で、アンとギルバートがケ

ンカをする時のシーンのようだ。乃里子は満ちたりた思いの中に、甘い酔いさえしのびよってくるのを感じた。

「許さないわ。絶対に……」

あと一回、岩永があやまったら許してやろう。乃里子がそのために語調をどう変えようかと思案し始めた時だ。岩永が不意に顔を上げた。微笑は消えている。その代わり彼の表情にあったものは、乃里子が初めて見るような怒りであった。

「馬鹿にすんなよ」

岩永は立ち上がりながら言った。膝を大きな音をたててはたいいた。

「男が手についてあやまってんじゃねえかよ。それを今の言い方はねえだろ」

恐怖が乃里子を襲った。岩永の目は、苦しうにも、痛そうにもみえた。グラウンドを走る時と同じ目だった。校庭の隅から隅まで全力疾走した後、荒い息をしながらよく岩永はこんな表情をしていた。

「オレはお前とこれから絶対に口をきかんぞ。卒業するまでだ。オレがきかんっていったら絶対にきかん。オレのやり方をよく見とけよ」

岩永はそう言うと、再び小川君の方へ顔を向けた。

「おい、十八番の席、どこだよ」

「……」

小川君は窓ぎわから二列目の席をさした。ドストドと床を踏みならすように岩永は歩いて行った。そしてどっかりと腰をおろした。それがきつかけのように、他の生徒たちも机や椅子の音をたてながら移動し始めた。

仕方なく乃里子もカバンを持って、席を移ることにした。もちろん岩永の隣りの席だ。彼は横顔を見せたまま、黙って黒板を見つめている。ふっと乃里子は涙がこぼれそうになった。

(林真理子『葡萄が目にしみる』による)

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、^{*}明法博士にて助教清原の善澄と云ふ者ありけり。道の才は並びなくして、古^{いにしへ}の博士にも劣らぬ者にてぞありける。年七十に余りて、世の中に用ゐられてなむありける。それが家いみじく貧しかりければ、よろづ叶^{かな}はでぞ過ぐしける。

しかる間、居たる家に強盗入りけり。賢く構へて、善澄、逃げて板敷の下に這^はひ入りければ、盗人もえ見つけずなりぬ。盗人、入り立ちて心に任せて物を取りて、物²を破り打ちがはめかし踏み壊^{こぼ}ち、ののしりて出でにけり。

その時に、善澄板敷の下よりいそぎ出でて、盗人の出でぬる後に門に走り出でて、音^{こゑ}をあけて、「や、おのれら、しや顔ども皆見つ。夜明けむままに、^{*}検非違使の別当に申して、片端より捕へさせてむとす」と、いみじく妬くおほえけるままに叫びて、門を叩きて云ひかけければ、盗人これを聞きて、「これ聞け、おのれら。いざ、返りてこれ打ち殺してむ」と云ひて、はらはらと走り返りければ、**A** 手を迷はして、家に逃げ入りて、板敷の下にいそぎ入らむとするに、迷ひて入るほど

に、額^{*}を延に突きて急ともえ入りあへざりければ、盗人、走り来て、取りて引き出でて、大刀をもつて頭をさんざんに打ち破りて殺してけり。さて盗人は逃げにければ、云ふ甲斐^{かひ}なくてやみにけり。

「善澄、才はめでたかりけれども、つゆ和魂^{*}なかりける者にて、か⁴かる心幼きことを云ひて死ぬるなり」とぞ、聞きと聞く人に云ひ謗^{そと}られける、となむ語り伝へたるとや。

〔『今昔物語』による〕

【注】 * 明法博士 律令(法律)を学ぶ学問の専門家。

* 検非違使(げびいし) 治安維持を目的とする役所の役人。

* 延 板敷の縁。

* 和魂(やまとだまし) 実務的な知恵・才能・胆力。

問一 ——線部1「賢く構へて」とあるが、何について言ったものか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 盗人の強欲さ
- イ 強盗の用心深さ
- ウ 善澄の思慮深さ
- エ 古の博士の勤勉さ

問二 ——線部2「物を破り打ちがはめかし踏み壊ち、ののしりて出でにけり」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 大きな音を立てて近所の人の助けを呼びながら、外へ出て行った。
- イ たいした物が無いので、家主の貧乏さをけなしながら外へ出て行った。
- ウ 家中の物を壊して大きな音を立て、大声でさわぎながら外へ出て行った。
- エ 大切なものを全部取られたので、腹いせに大暴れしながら外へ出て行った。

問三 ——線部3「盗人の出でぬる後に門に走り出でて」とあるが、なぜこのような行動をとったのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 強盗が恐ろしかったので早く家から逃げるため。
- イ 強盗が立ち去ってしまいう前に顔を見ておくため。
- ウ 強盗に対してあまりに腹がたってしまったため。
- エ 強盗の存在を周りの人たちに早く知らせるため。

問四 空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 盗人
- イ 善澄
- ウ 古の博士
- エ 検非違使

問五 ——線部4「かかる心幼きこと」とあるが、それは善澄のどのような行為を指しているか。説明せよ。

